

## 訃報①

読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか？ 小社から『気に成る本』と『気が分る本』を出された藤森博明先生が今年1月21日に急逝されました。享年61歳という若さでした。

「気」の世界に新しい精神と方法を導入すべく『ウエルネス 気の家』（ハーテック）という健康道場を主催し大活躍中だった矢先のことでした。奥様も茫然自失の状態でしたので、公にすることをためらっていたのですが、五カ月ほど経ち、先日メールをいただいたので、読者の皆様にお知らせすることにし、遅ればせながらご冥福を祈らせていただくことにしました。

藤森さんは以前は算数の教科書や『中学受験は算数しだい親しだい』（実業の日本）などの理工系の本を書いておられたましたが、それから西野流呼吸法を学ばれ、「気」の世界に参入されるという一大転換を成し遂げられました。また多方面のことに関心を持った大変な読書家でもあり、お亡くなりになる直前までメールでやりとりをしました。そしてとても心優しい方で、それは『気が分る本』の中の「気は究極の交流手段」というセクションで次のようなエピソードに触れておられることからよく分ります。生前の藤森さんのお人柄を偲ぶために謹んでご紹介させていただきます。

キーストンという名馬の物語があります。

昭和42年12月阪神大賞典。キーストンはダービー制覇以来の盟友山本正司騎手を背に、気持ち良さそうに馬場を疾走していた

5頭立てということもあって、誰もがキーストンの勝利を疑わなかった。それまでの戦績は24戦18勝、2着3回という驚異的なもの。

四コーナーを回った時、突然、キーストンの小柄な馬体がラチ内に沈んだ。山本騎手は宙を飛んでターフに叩き付けられた。キーストンはもんどりうって、半転……。傍らを後続の馬がドドドドと駆け抜けて

行く。

キーストンの左前足は完全脱臼。今や皮一枚で繋がっている状態。立ち上がろうにも全く用をなさない。彼方では山本騎手が脳震盪をおこして、ピクリとも動かない。

騎手の方を向いて首を振りもがいていたキーストンは三本の足でやっと立ち上がると、一步また一步と、昏倒した騎手に向かって歩き始めた。激痛は計り知れない。

馬が三本足で歩くなど想像も出来ない。観客は心のうちに叫んだ。「キーストン、もう歩かなくていいよ!」「それ以上歩いてはダメだ」どの馬が勝ったかはもうどうでも良いことだった。

実況のアナウンサー松本暢章は涙声となってキーストンを追った。最早手の施しようも無い完全脱臼。まさか完全脱臼の馬が歩けるはずが無いのだ!

キーストンは倒れている山本騎手の所に辿り着くと、心配げに鼻面を摺り寄せ、二度三度起こして立たせようとする。人々の目に、それはまるで、母馬が起き上がれない子馬を励まして、鼻面で優しく立たせようとしている姿に見えた。

山本騎手はその時見た。キーストンの骨折を知らなかったが、ボンヤリした視野の中で大きな悲しそうな目、済まなさそうにしばたたく愛馬の目をみた。

山本騎手はキーストンの摺り寄せてくる鼻面を掻き抱いて「いいよ、いいよ」と撫で、駆けつけた厩務員に手綱を渡すと、また意識を失っていった。

暫くして甦生した山本騎手は、愛馬の骨折と安楽死を聞いて泣いた。激痛と苦しみの中でキーストンは、なぜ自分をあんな優しい目で見詰めたのだろうか? 別れを告げに来たのだろうか? 山本騎手はキーストンと別れてから、馬に乗れなくなってしまった。「もう騎乗出来ない。」

現在調教師の山本正司は、キーストンの話が出ると今でも涙が止まらない。

この馬を見出したのは山本騎手だった。キーストンは「体は小さいし、気質も大人しく、何の特徴もない馬で、動きは固くごちなかつた。駈歩では良好な動きを見せたが、それを踏まえても大きな期待を抱かせる馬ではなかつた」と言う。

当初の印象を覆す活躍について、山本は「馬の個性も色々あって、最初からいいのもいるけど、初めはなんだかよくわからなくて、時間が経つに連れていい所が出てくる馬がいるものです。キーストンもそういうタイプだったんですね」と語る。

人間と馬とは、どのようにして交流するのだろうか。

キーストンが死期を悟りながらも山本騎手を気遣い鼻面を摺り寄せる姿は、言葉では表せない。それは両者が発する、互いを想い遣る「気」に他ならない。

動物は母親の出す情愛に満ちた気や、身を護るための殺気を感じて生きる。

人間も雰囲気とか、空気とか、気配とかというもので相手の出す気を感じます。

動物を飼った経験のある人なら、動物と深い交流が起こることを知っているはずです。

それが愛情に満ちた気なのか、ちょっと機嫌の悪い気なのかスグに分る。

私は子供の頃、コリー犬を飼っていました。

死期が近づいた朝、顔を出すと尻尾を振りながら、立てない身を懸命に起こそうとします。

「いいんだよ、寝てな。」そう語りながら撫でました。気は犬に通じます。

あるTV番組で、北極海に棲むアザラシの親子の映像が流れました。生後間もない子アザラシが極寒の海に落ちてしまったのです。

体温を奪われると数分で死んでしまいます。母アザラシは必死に不

自由な手を使いながら、子アザラシを救い上げました。

その後、母親は子アザラシをどうするのだろうと注目していました。

きっと舌で舐めて、暖めるのだろうと思ったのです。

ところが、何と短い手で子アザラシを撫でて、甦生させたのです。

子アザラシにはみるみる「生气」が蘇って来ました。

やはり、手から発せられる「気」は凄い。

気の交流は生命を救うのです。